

2023年4月9日
宮崎中部教会イースター礼拝
牧師 乾元美

詩編 30 : 2~6

ローマの信徒への手紙 6 : 3~11

「新しい命」

【前奏】

【招詞】 詩編 68 : 20~21

【祈祷】

【聖書】 詩編 30 : 2~6、ローマの信徒への手紙 6 : 3~11

【説教】 「新しい命」

<イエスさまの復活>

今日は、イエスさまの復活をお祝いするイースターです。

教会は、神の御子イエスさまが、まことの人となってこの世に来られ、わたしたちを罪から救うために、十字架に架かって死んで下さったこと。そして、お墓に葬られ、三日目に、死者の中からよみがえられた、ということを知っています。

…約 2000 年前、イエスさまという方が、エルサレムのゴルゴタの丘で、十字架に架けられて死んだ。そのことは、多くの人にとって、まだ信じられる出来事かも知れません。

わたしたちは、人が死ぬ、ということはよく知っています。愛する人を見送ったことがある。そして、わたしもやがて死ぬ。これは、誰もが知っている現実です。

でも、死者の中からよみがえる。これは、わたしたちの常識を超えた、とても不思議な、信じ難い出来事です。

この出来事を、わたしたちは説明したり、頭で納得したりすることは出来ません。そうしようとする試みは、歴史の中で何度もありました。たとえば、イエスさまは、実は仮死状態だったので、三日後に息を吹き返したのだ。いや、それは弟子たちが見た、リアルな幻だったのだ。いや、復活というのは、弟子たちの心の中で生きているということなのだ…。

…でも、イエスさまの復活は、わたしたちの世界で確かに起こった、神さまの出来事です。十字架で死なれたイエスさまは、神の力によって復活させられました。わたしたちは、神さまの力が、死の力を覆い尽くしたのだ。神の力は、死に打ち勝つことが出来るのだ。そのことを、信じているのです。

ですから、イエスさまの復活が、本当にあったか、なかったか。そのようなことを論じる必要はありません。教会は、復活をはっきりと信じているからです。

むしろ、わたしたちにとって大切なのは、なぜ、イエスさまは死者の中からよみがえられたのか、ということです。

復活という出来事があった。実は、それだけであれば、確かにそれは不思議なことかも知れませんが、そんなすごいことがあったんだなあ、というだけで、今のわたしたちには、あまり関係ないことです。

でも、このイエスさまの復活は、今、ここに生きているわたしたちに関係することなのです。ここに生きているわたしたちのために、イエスさまは十字架で死に、ここに生きているわたしたちのために、イエスさまは死者の中からよみがえられたのです。

だからこそ、わたしたちは、教会は、イエスさまの復活の出来事を記念して、心から喜んで、この出来事を与えて下さった神さまを賛美し、礼拝するのです。

では、イエスさまの復活は、わたしたちにとって一体どのような意味があるのでしょうか。

<新しい命>

先ほど読まれたローマの信徒への手紙は、パウロという伝道者が、ローマの教会の人々に宛てた手紙です。その中でも今日の6章は、特に「洗礼」の意味について語っているところです。その4節には、このようにありました。

「わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。」

キリストが、御父の栄光によって、死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるため。ここでは、イエスさまが十字架で死に、そして復活なさったのは、わたしたちが「新しい命に生きるため」である、と語っています。

新しい命。それは、どのような命なのでしょうか。

わたしたちは、4月に入り、新年度の歩みを始めています。それは一年の区切りであり、新しい環境、新しい生活が始まる人もいます。心機一転、気持ちを新たに。そんな気持ちになりますけれども、ここで言う新しい命とは、何かわたしたちの気持ちが一新する、というようなことではありません。

また一方で、自分の生活は何も変わらない。新しいことなんて何もない。そんな気持ちの方もおられるかも知れません。でも、聖書が語る「新しさ」は、わたしたちの気持ちや、生活に関わらず、外から訪れる「新しさ」です。

「新しい命」の「新しい」とは、質がこれまでとは違うものになる、新しさのことです。つまり、わたしたちの存在そのものが、これまでとは違う、新しいものになる。その新しさが、イエスさまの復活によって、わたしたちに与えられる、ということなのです。

<古い自分>

これまでとは違う、新しい命。では、これまではどうだったのでしょうか。

「新しい命」と対比して、6節には「古い自分」という言葉が出てきます。「古い自分」。それは6節によれば、「罪に支配された体」であり、「罪の奴隷」であった自分のことです。

古いわたしたちは、イエスさまと出会う前は、罪に支配されていた。罪の奴隷になっていた、というのです。

罪の支配。罪の奴隷。古いわたしたちは、罪に捕らわれていた。

ここでいう「罪」とは、何か盗んだとか、悪いことをしたとか、そういう意味ではありません。そういう罪であるなら、いや、わたしは罪人などではない、犯罪など犯したことがない、罪の奴隷なんかじゃない、という方がおられるかも知れません。

でも、聖書における「罪」とは、「的外れ」という意味です。的を外す。何の的を外しているのか。それは、神さまという的のです。

わたしたちは、神さまに命を造られた者です。神さまは、わたしたちを、神さまと共に生きる者としてお造りになりました。神さまの呼びかけに応え、神さまを愛し、神さまと共に生きる。神さまという的に、わたしという全存在の方向を向けて、神さまと向かい合って生きる。それが、神さまに造られた、わたしたちの人間の本来の姿であり、生き方です。そしてそれが、わたしたちが最も幸いな、最も平安な生き方です。

しかし、わたしたちは、神さまの思いよりも、自分の思いを優先して、神さまの方を向こうとしません。自分勝手な方向を向き、神さまの声に耳を傾けず、神さまの呼びかけに応えず、神さまの眼差しを無視している。自分の好きなものを神として拝み、神さまから離れて歩んでいる。

そうして、神さまに背を向けること。神さまから離れること。これが、的を外して生きていく、わたしたちの「罪」なのです。わたしたちは皆、この罪に捕らえられています。

そして「罪」とは、そのように命の源、愛の源である神さまから離れていくことです。罪の行きつく先は、神さまも、自分も、隣人も愛することのできない悲惨です。そしてやがては、この罪の報いを受け、神さまとの関係を失う、滅びの死に至るのです。

<イエスさまの十字架の死>

わたしたちは、どうしたらこの罪を赦していただくことが出来るのでしょうか。どうしたら悲惨を、罪の裁きを、滅びの死を免れることが出来るのでしょうか。

わたしたちが罪から解放されるのは、7節に「死んだ者は、罪から解放されています」とあるように、もはや死ぬしかないのです。

わたしたちは、自分で救いを得ることは出来ません。善行を積み重ねて、ポイントを貯めて、罪をチャラにすることは出来ません。それほどに、わたしたちが神さまに対して犯した罪というのは、どれだけ努力をしても、どれだけ修行を積んでも、たとえ自分の命を差し出しても、決して償いきれないほどの、重い罪なのです。

神さまは、わたしたちの罪を、水に流したりはなさいません。見て見ぬふりはされません。この罪をきちんと審き、神さまご自身の正義を貫かれます。

また神さまは、わたしたちの罪に対して、激しく怒り、また深く悲しんでおられます。

しかし、驚くべきことに。それ以上に神さまは、お造りになったわたしたち一人一人を、愛しておられる、というのです。ですから、わたしたちが、どうしようもない罪に陥り、そのまま死んで滅びることを、よしとされなかった。わたしたちが、神さまから離れて、神さまの御手から失われることを、お認めにならなかった。

だから神さまは、わたしたちの罪を解決するために、ご自分の御子であるイエスさまを、わたしたちに与えて下さったのです。

神の御子イエスさまは、わたしたちの罪を、すべてご自分の身に担われました。そして、まるでご自分が罪人であったかのように、裁きを受けて、十字架につけられ、苦しみ抜いて。神さまから引き離されて、滅びにいたる、その裁きの苦しみと絶望を引き受けて。わたしたちの代わりに、死んで下さったのです。

イエスさまの十字架の死は、わたしたちの罪を償うためです。神の御子イエスさまだからこそ、この方は、わたしたちと同じまことの人となり、すべての人間の罪を担って、ご自分の命によって罪を償って下さることがお出来になりました。

そして、イエスさまが裁きを受けて十字架で死なれた死を、このわたしが、罪の裁きを受けて死んだことにして下さるといいます。父なる神さまは、御子イエスさまの死を、罪人のあなたの死として、受け取ってよい。罪人のあなたは、罪に支配されたあなたは、イエスさまの十字架において一緒に死んだ。そう宣言して下さるのです。

<洗礼>

わたしたちは、このイエスさまの十字架の死を、「洗礼」によって受け取ります。

今日読まれた、ローマの信徒への手紙の6章は、イエスさまの救いを信じ、洗礼を受けるということが、どういうことかを語っているところです。

3節にはこうありました。「それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。」まず、洗礼を受けるとは、「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受け」ることである、と語られています。

洗礼とは、わたしたちがイエスさまと一つに結ばれる、という目に見えない出来事を、水という「しるし」を使って、目に見える仕方で現わしています。

今、わたしたちの教会で洗礼を行う時は、牧師が手に掬った水を、洗礼を受ける方の頭につける方法で行っています。でもかつては、洗礼は川などで全身に水を浸して行われました。今もそうしている教会があります。「洗礼」は「バプテスマ」という言葉ですが、そもそもバプテスマとは、「浸す、沈める」という意味なのです。

「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受ける」。結ばれる、という言葉は、～の中に、という言葉で、ここを直訳すれば、「キリスト・イエスの中に浸される」となります。

わたしという存在が、水の中に沈められるように、イエスさまの中に全部浸されて、包み込まれて、一体となる。それが、「洗礼」という出来事なのです。

そして、わたしたちがイエスさまの中に浸されて、洗礼を受けて、イエスさまと一つにされるのは、「その死にあずかるため」なのだ、と言います。

わたしたちはまず、イエスさまの中に浸されて、イエスさまの十字架の死の中に沈められます。そのようにして、わたしもイエスさまの十字架の死に、共に死ぬのです。

4 節に、「わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました」とある通りです。また 6 節には、「わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。」とあります。

このように、洗礼を受けるとは、イエスさまの十字架の死にあずかって、罪人であるわたし自身も死ぬことなのです。

<新しい命>

そして、イエスさまの十字架の死に結ばれて、死んだ罪人のわたしはどうなるのか。

4 節には「わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです」とありました。

イエスさまは、十字架で死なれ、そして復活なさいました。そうであるならば、このイエスさまに結ばれたわたしたちは、イエスさまの十字架の死にあずかったなら、イエスさまの復活にもあずかることが出来る。そうして、古い罪の自分は死んで、わたしたちは新しい命を生きるようになる。そう語られているのです。

8～11 節にはこう語られています。「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。」

わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなる。今まで、罪に生きてきた。神さまから離れて、的を外して歩んでいた。でも、十字架のキリストに結ばれて、罪に死んだわたしたちは、復活のキリストに結ばれて、今度は神に向かって、神に対して生きるようになる。これこそ、わたしたちが生き始める「新しい命」なのです。

イエスさまが十字架で死なれたのは、わたしたちの罪を償うためであり、わたしたちがその死にあずかるためでした。そして、イエスさまが復活なされたのは、罪に死んだわたしたちが、神さまと共に生きる新しい命に生かされるためだったのです。

これは、洗礼を受けた者に、神さまの力によって与えられる、新しいわたしの現実です。新しい命は、精神論や、思想的なものや、心の問題ではありません。神さまから、復活のイエスさまから、いただくものです。

実際に、洗礼を受けたわたしという存在は、もはや罪人ではなくなるのです。キリストに結ばれて、キリストのものとして、神さまのものとして、新しくされるのです。

でも、わたしたちは目の前の、自分の実際の現実を見て、いや、本当にそうだろうか、と疑ってしまうかも知れません。わたしは罪から解放されたのに、また罪を犯している。神さまに向かって生きる者とされたのに、また神さまを疑い、神さまを忘れ、罪人の歩みを繰り返している。一体、わたしのどこが新しいのだろうか。…わたしたちは、自分自身を見つめるなら、古い自分と何も変わっていない自分につながりしてしまうことでしょう。

しかし、これは、わたしたちが洗礼を受けて、目に見えてすぐに素晴らしい人間になれる、理想の人間になれる、ということではありません。わたしたちは、やはり、罪深く、弱く、愚かな歩みを続けてしまうのです。

でも、それにもかかわらず。神さまが、わたしたちを、もはや罪人とはみなさない、と言って下さるのです。イエスさまの十字架にあって、もうあなたの罪の償いは終わった。もう罪の負債はすべて返済された。だから、神さまはもはや、わたしたちを罪人ではなく、これから先、永遠に、愛する神さまの子どもとして見つめ、受け入れる、と言って下さるのです。

わたしたちは、目の前の罪の現実を振り払い、この神さまの赦しの眼差しを信じて、この神の子とされている現実を支えられて、これからを歩むのです。

だから、わたしたちは、これから罪を赦されるため、救っていただくために、善い行いをしたり、努力をしたりするものではありません。わたしたちは自分の罪に対して、何もできなかったのです。でも、イエスさまによって、もう罪を赦された。もう救っていただいた。もう神さまの子どもとされた。だから、わたしたちは、そこまでわたしに向き合い、愛して下さる神さまに心に向けて、神さまに喜ばれる歩みを、祈り願っていくのです。

<復活>

そして最後に、復活のこととして、9節にはこうありました。「そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません」。

わたしたちは、復活のイエスさまによって、「新しい命」にあずかりました。

でも、わたしたちはこの地上の歩みをいつか終えて、必ずみんな死にます。死は、わたしたちの人生の最後に待ち構えており、圧倒的な力で支配してしまうかのように思えます。

しかし「死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない」。「死は、もはやキリストを支配しません」と言われています。

神さまは死の力を超えて、イエスさまを復活させられました。そうであるなら、もはや死ぬことがない、死に支配されない復活のイエスさまに、結ばれ、浸され、一つにされているわたしたちのことも、死は支配することは出来ないのです。

わたしたちの人生の最後を待ち受け、支配するのは、死ではありません。わたしたちを支配しているのは、死に勝利する神の力であり、復活の命です。確かに、わたしたちは死にます。しかし、終わりの日、天におられるイエスさまが再び来られ、救いの完成が訪れる日。わたしたちもまた、イエスさまにあって、神の力によって、復活させられます。

死はもはや、イエスさまとわたしたちを引き離すことは出来ません。しかも、わたしたちは、もう今この時から、十字架で死なれ、復活なされたイエスさまの命に与り、永遠に至る、神さまと共に生きる、新しい命を、すでに生き始めているのです。

イエスさまの復活。それは、イエスさまの十字架にあって、罪に死んだわたしたちに与えられた、神さまに向かい、神さまと共に生きる、新しい命です。イエスさまの復活。それは、死に打ち勝たれたイエスさまに結ばれたわたしたちの、将来の復活の約束です。

この与えられた新しい命で、わたしたちは神さまに対して生きる。イエスさまと共に生きる。そしてこの恵みは、この喜びは、わたしたちの復活の約束にあって、この地上を生きている時も、やがて死んでも、そして死の向こうに至るまでも、永遠に続いていくのです。

【お祈り】

天の父なる神さま、御名をほめたたえます。

あなたがわたしたちを愛して下さったゆえに、御子イエスさまが、わたしたちの罪のために十字架に架かり、罪人であった古いわたしたちが、共に葬られたこと。また、御子イエスさまが復活なされたことによって、罪に死んだわたしたちが、あなたに対して生きる新しい命を与えられたこと。また、わたしたちも、もはや死に支配されておらず、復活にあずかる希望を与えられていることを示され、心から感謝いたします。

イエスさまと一つに結ばれている、この喜びと幸いをいつも覚えて歩むことが出来ますように。そして、罪を赦された者として、いただいた新しい命に生きる者として、あなたに喜ばれる歩みが出来ますように。そして、一人でも多くの者が、イエスさまの十字架と復活の恵みを信じ、洗礼を受け、新しい命をいただくことが出来ますように。

わたしたちの救い主、復活の主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。

【讚美歌】 3 2 6 「地よ、声たかく」

【信仰告白】 日本基督教団信仰告白

【転入会式】

【聖餐】

【讚美歌】 8 1 「主の食卓を囲み」

【献金】 【主の祈り】

【讚美歌】 2 9 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン